

# ものづくりの町、荒川に息づく

# 銅の伝統技術と新しい発想



東京23区内で2番目に小さい荒川区。面積にして10.16km<sup>2</sup>という、ごく狭いエリアのなかにはものづくり企業がおよそ2000社集まっている。さらに文化財として登録されている職人が50人もおり、まさにものづくりの町、荒川。この地でものづくりがさかんな理由を探ってみた。

## ものづくり企業が集結する荒川区

東京唯一の路面電車「都電荒川線」。線路脇にはバラや季節の花々が沿線を彩る。狭い路地に、昔ながらの商店街。この街の移動は車よりも徒歩が合う。そんな住民の足として、都電荒川線は荒川区の中心を運行している。ペルをチンチンと鳴らして、ゆっくりと発車する。都会の喧騒をよそに、古き良き下町の姿がここには残っている。

この下町にもものづくり企業が多い理由は何だろうか。「南千住・日暮里は明治時代から工業の街となつていましたが、その他の地域は、もともと農村地帯でした。関東



荒川区産業経済部  
経営支援課 課長  
小堀 純氏

大震災があつてから、自動車や家具、重化学などの多様な工業系の企業が多数移転してきました。現在は印刷や金属加工、

皮革工業を中心に、ものづくり企業がおよそ2000社あります。これは荒川区の全企業の20%を占め、全国平均(約9%)や東京平均(約8%)を大きく上回っています」と、荒川区産業経済部経営支援課 小堀課長。さらに区では積極的にもものづくり企業を手厚くサポートしているという。

「コーデイナーが、経営基盤強化や販路拡大、新商品・事業の企画推進、ICT教育、人材育成、各種補助金制度などの相談にのつています。また、区内中小企業が開発した新製品・新技術を表彰したり、高い技術を有する職人に対して『荒川マイスター』の称号を贈っています。その他、若手経営者や後継者が活動する『あすめし会』なども支援しています」

多業種の人々が一緒に学び、自発的な活動も行っており、若手の勢いを感じると小堀課長はいう。

## 職人の技は後世に残したい宝物

一方、荒川区には伝統工芸技術に携わる職人も多く活躍している。金工や塗師や染物屋、木版画摺、人形づくり、刷毛や扇子、べつ甲細工など、さまざまな分野の職人がいる。

「昭和52年から伝統技術に携わる職人の調査をしたところ、素晴らしい技を持つ職人がたくさんいることがわかり、これを小中学生をはじめ区民に伝えようと、熱心な取り組みが始まりました。現在、文化財として登録された職人が50人います。職人はいわば荒川区の宝物。その宝を後世に残していくためにさまざまな活動を行っています」と、荒川ふるさと文化館 野尻館長は語る。



継者の育成にも力を入れている。

「平成21年から始まった『荒川の匠育成事業』は、行政が職人の弟子を募集し、師匠とのマッチングや研修のサポート等を行っています。荒川区の伝統工芸は、今、手助けしなければなくなってしまうという強い危機感を持っています。このような後継者の育成事業を文化財保護の立場から区単独で行っているのは荒川区ぐらいでしょう」この研修サポートで何人も後継者が育つてきている。行政のきめ細かいサポートだけでなく、保存団体の荒川区伝統工芸技術保存会、そして地域一体となった取り組みが着実に形となりつつある。根底には、「すぐれた技をなんとかして後世に残したい」という荒川区の人々の熱い思いがあるのだろう。



荒川区立  
荒川ふるさと文化館 館長  
野尻 かおる氏

た技をなんとかして後世に残したい」という荒川区の人々の熱い思いがあるのだろう。

形のない文化財を保護していくために、映像として記録を残したり、作品を買い取って荒川ふるさと文化館に収蔵したり、職人が堂に会して展示・実演を行う「あらかわの伝

# 荒川区 銅を使ったものづくりの現場を訪ねて

荒川区が「後世に残したい」と願う職人の技、ものづくり企業の技術はどのようなものだろうか。数多くの職人、企業のなかから銅を使用したものづくりの現場をいくつか訪れた。

## 鑄造 菓子満氏

平成28年に黄綬褒章を受賞した菓子氏は、美術館や作家から依頼された美術工芸品を忠実に再現する高い技術をもつ。高知県の坂本龍馬像を修復したり、福井



美術鑄金家 菓子満氏

県の橋本左内坐像を原型に拡大した像を製作したり、鑄造に関する豊富な知識と技術を頼りに、国内外から多くの依頼を受けている。菓子氏は真土型鑄造法という、細かい鑄肌、繊細な紋様が写し取れる日本古来の技法を用いている。真土とは、砂と粘土を混ぜて焼いた土を粉碎したもの。砂と粘土が入りやすかったことから、戦前、この地に鑄物屋が何軒もありました。家業を継ぐなら東京藝術大学で知識を学ぶよう勧めたのは父であった。その父が大学入學の日亡くなり、「父の跡を継ぐのはおまえしかない」と兄が入學金を払ってくれた。このようないきさつから藝大には思い入れがあり、また近いこともあって、たくさんの方の学生を工房に受け入れ、若い人に惜しみなく技術を教えていったという。



▲「吾、酔い痴れて 蟹と戯むる」最近では小型の作品を手がけている



◀荒川ふるさと文化館前に設置されている橋本左内坐像

真土型鑄造法では、8時間以上かけて鑄型を800℃程度で焼成した後、銅合金の溶解を行い、鑄型が温かいうちに鑄造する。この一連の作業を「吹き」と呼ぶが、大型の作品ではたくさんの方の協力を得て吹きを行った後、「後吹き」と言って、皆でお酒を飲むのが楽しみであったと振り返る。ともに汗をかきながら吹きをした弟子のなかには、現在鑄造作家として、または先生として活躍している人も多くいるという。

## 鍛金 長澤製作所

創業は大正13年。祖父、父、子と三代にわたって、銅や真鍮、銀などの金属板を叩いて成形する鍛金で茶器や食器等の実用品を製作している。腕の良い職人であった初代・長澤金次郎(巧益)氏は浅草で独立した後、戦後、荒川の地に移ってきた。

「初代はセンスが抜群に良く、それを感じるのには初代の道具を使うときです。職人は道具づくりも自分で行いますが、製作するものの形状や金属の性質など、すべてを把握したうえで、それに寄り添う道具がつくれます。初代の道具はフィットするんですよ」

こう語る三代目、利久氏は異色の経歴を持ち、一時美容師として働いていた時期がある。手先が器用であったため努力しなかったと当時を振り返る。その後、父の跡を継いで鍛金の世界に入ると頭角を現す。美容師時代の接客技術が活かしたのである。最近では百貨店での対面販売などお客さまと接する機会が増えているが、利久氏はお客さまの要望を聞き入れて、たとえば急須の注ぎ口を工夫して水切れを良くするなど、使い勝手の良いものに変えていった。

「良いと思うものだけを作れば売れるという考えで、廃業していく職人をたくさん見てきました。商売として成り立たなければ続いていきません」と力説する。利久氏は急須の注ぎ口の接合をみせてくれた。ハサミで注ぎ口を接合される急須側の形状に合わせて切っていく。図面も下書きもない。迷いなく切られた注ぎ口を急須側にひねり入れれば、ぴったりとかしめられた。途絶えることなく、後世に残って欲しいと思わせる、素晴らしい手仕事であった。



使い勝手が良いと評判の茶器類

「良いと思うものだけを作れば売れるという考えで、廃業していく職人をたくさん見てきました。商売として成り立たなければ続いていきません」と力説する。利久氏は急須の注ぎ口の接合をみせてくれた。ハサミで注ぎ口を接合される急須側の形状に合わせて切っていく。図面も下書きもない。迷いなく切られた注ぎ口を急須側にひねり入れれば、ぴったりとかしめられた。途絶えることなく、後世に残って欲しいと思わせる、素晴らしい手仕事であった。



(右)注ぎ口を水切れのよい形に加工していく。当金などは初代の道具を使用している。(左)急須側の形状に合うように注ぎ口を切っていく



長澤製作所 三代目 長澤 利久氏

## 自転車用ベルの製造 (株)東京ベル製作所

創業は昭和24年。自転車メーカーからベルの専業会社として独立した。昭和32年に荒川区に移ったが、周辺には金属加工業が多く、また荒川は「自転車町の町」と呼ばれるほど、自転車関連の工場が多数存在していた。

かつて自転車用ベルといえば鉄製であったが、軽さやデザイン性の向上から真鍮やアルミニウム、樹脂などに素材は変わっている。コストの低い中国製などが国内では増えているが、一方でデザイン性や機能性の高いものは欧州や米国などでは人気があり、数多くの製品を輸出している。とくに同社の製品は海外でも高く評価されており、新しい機構とギヤの動きが透けて見える「クリスタルベル」はニューヨーク近代美術館(MOMA)のショップでも販売された。また、ベルが水平ではなく進行方向を向くようデザインされた「テクノベル」はメカニク的な外観を持ち、欧州でも人気がある。同社製品のなかでユニークなのが熊避けベルで、使用しないときはワンタッチで音を消すことができる消音機能が付いている。さらにこの消音機能を付けた風鈴も開発されている。「常に新しいものを世に出していきたい」と、これまでにない発想で、みたことのない形や機構を持つベルを産み出している。



音響部品の抜き絞り加工



株式会社東京ベル製作所 代表取締役社長 市村 晃一氏



ダイヤモンドベル。MoMAショップで販売されたクリスタルベルの姉妹版。音響素材に真鍮を使用し、余韻のある音色が特長。機構がユニークで、通常のレバー部分はなく、ベル本体を指でなでると本体が回転し、ベルが鳴る



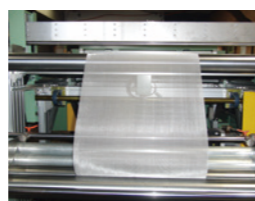
テクノベル。ベルが前方を向くように取り付けられる。真鍮製

構を持つベルを産み出しています」と同社の市村代表取締役社長はいう。独創的な製品は数多くのグッドデザイン賞を受賞しており、同社は業界を代表するベルメーカーとして、国内で大きなシェアを誇っている。

## 金網の製造 石川金網(株)

大正11年、荒川区に金網専門メーカーとして創業した。周辺にはものづくり企業が多く、建材関連の工場もたくさん存在した。それから95年超。金網とパンチングの専門メーカーとして、ステンレス系、鉄系、銅系、ニッケル系、アルミ系、チタン系など、あらゆる金属を扱い、織り方は平織、綾織、平織、綾織など多様で、常時6000品目の金網を取り扱う。とくに銅合金を使用したメッシュは近年、海水ろ過装置のフィルターとして採用されている。

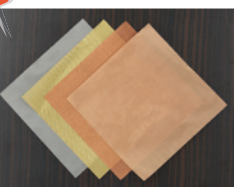
同社では時代に合わせた製品を多数開発してきたが、なかでも最近開発された、世界初の金網の折り紙「ORIAMI」は数々の賞を受賞するなど、注目を集めている。「リーマンショック後に仕事が減り、新しいものを産み出していけないと生き残っていけないと、熟練職人が文具やホビー用品の開発を進めていたところ、遊び心でつくった「折り鶴」が見事な出来栄であったため、開発がスタートしました」と石川代表取締役社長は説明する。しかし、従来の銅の金網では硬くて折りづらく、かといって柔らかくすると、今度は折れなくなる。布のようにしなやかで紙のように張りのある銅の金網をつくるのに試行錯誤を重ねられた。荒川区産業展でモニター販売をしたところ高い評価を得て、さらに日本折紙協会の協力によって安心して楽しめる製品に改良された。現在は「おりあみアートクラブ」が設立されるなど、アクセサリーや手芸、アートの材料として愛好者が増えている。



ORIAMIの製造の様子



石川金網株式会社 代表取締役社長 石川 幸男氏



ORIAMI



折鶴

紙と同じように折ることができる。紙よりもしっかりと形状を保ち、半永久的に鑑賞できる

「リーマンショック後に仕事が減り、新しいものを産み出していけないと生き残っていけないと、熟練職人が文具やホビー用品の開発を進めていたところ、遊び心でつくった「折り鶴」が見事な出来栄であったため、開発がスタートしました」と石川代表取締役社長は説明する。しかし、従来の銅の金網では硬くて折りづらく、かといって柔らかくすると、今度は折れなくなる。布のようにしなやかで紙のように張りのある銅の金網をつくるのに試行錯誤を重ねられた。荒川区産業展でモニター販売をしたところ高い評価を得て、さらに日本折紙協会の協力によって安心して楽しめる製品に改良された。現在は「おりあみアートクラブ」が設立されるなど、アクセサリーや手芸、アートの材料として愛好者が増えている。